

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

島貫 悟

【所属】(助成決定時)

東北大学大学院国際文化研究科

【研究題目】

柳宗悦とウィリアム・モリスについての比較思想研究

【研究の目的】(400字程度)

明治から昭和にかけて生きた思想家・宗教哲学者の柳宗悦(1889-1961年)は、近代化の中で無名の工人が作り出す日用品の美的価値を再評価し、その復興を目指す民藝運動を主導したことで知られている。他方、19世紀イギリスの詩人・思想家・デザイナー・工芸作家のウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)は、柳と同様、産業革命後の機械生産に対抗し、職人による手仕事の価値を見直すことによって、19世紀末のイギリスで起ったアーツ・アンド・クラフツ運動に先鞭を付けた人物である。柳とモリスの思想と実践は、ともに後世に与えた影響が大きく、その研究は国内外で既に行われてきているところであるが、両者の比較の観点に立った研究は少ない。しかしながら、両者を比較考察することによってはじめて、異文化理解や文化間対話という文脈において、両者の思想がもつ現代的意義を浮かび上がらせることができると考えられる。本研究は、そうした観点から柳とモリスの工芸論を比較し、その思想的関係を明らかにすることを目的として行われた。

【研究の内容・方法】(800字程度)

民藝運動の主導者である柳宗悦とアーツ・アンド・クラフツ運動の主導者であるウィリアム・モリスは、ともに近代の産業化に抵抗して手工芸の復興を唱えた思想家であり、工芸の分野で東西を代表する人物である。それゆえ、両者を扱った研究は既に国内外で行われているが、両者の比較の観点に立った研究は、近年に至るまであまりなされてこなかった。さらに、両者を比較した研究のほとんどは、モリスの思想や実践が柳に与えた影響を検証するものであり、柳とモリスの思想を対比し、それぞれの特徴を分析する比較思想的観点に立った研究はほとんど行われていない。そこで、本研究では比較思想研究の立場から柳とモリスそれぞれの主張を分析することによって、両者の思想的関係をより正確に理解することを目指した。

比較思想研究の立場から両者の特徴を分析した先行研究として、1934年に英文学者の寿岳文章(1900-1992年)によって書かれた「二つの工芸論——モリスと柳宗悦」という論稿がある。この中で寿岳は両者の共通点と相違点を分析し、特に相違点について、柳の工芸論には宗教性があるのに対し、モリスの工芸論には宗教性がないという見方を示した。こうした寿岳の理解はその後、半世紀以上にわたって引き継がれ、日本における柳モリス比較論の基調を形成してきた。さらに、この寿岳による理解は、近年行われた研究でも十分に見直されることなく、現在に至るまで引き継がれている。そこで、本研究ではこの寿岳の理解を見直すことを出発点として、柳とモリスの思想的関係をより正確に理解することを目指した。始めに、柳の工芸論とその背後にある仏教思想やキリスト教神秘主義との関係を明らかにすることを試みた。その上で、通常社会主義者と見なされ、宗教との関係はほとんど研究されてこなかったモリスの工芸論の背後にも、何らかの宗教性が存在しないかどうか、モリスの著作を広く分析することによって検討した。

【結論・考察】(400字程度)

従来、工人が無心で製作することを理想とする柳の主張に対しては、個性を否定する「人間機械」論であるとする批判があったが、柳の主張は浄土教を中心とした仏教思想と深く結びついており、その理想は工人たちの真の個性の解放にあったことが明らかとなった。一方、社会主義者として知られるモリスは、神や死後の世

界の存在について、この世での経験からは知り得ないとする不可知論の立場に立っていたが、モリスは宗教を否定したわけではなく、むしろ中世キリスト教や古代北欧の宗教に対しては肯定的な見方を示していた。とりわけ、モリスの工芸論には、ジョン・ラスキンの芸術論から受け継がれたキリスト教的人類愛の精神と、古代北欧文学のなかにモリスが見出した「勇気の崇拜」の精神が確かに流れていることが確認された。それゆえ、柳の工芸論には宗教性があり、モリスの工芸論には宗教性がないという寿岳の理解は見直される必要があり、今後両者を比較する際には、それぞれの主張がどのような宗教と結びついていたのかに注目すべきである。